郷土で生まれ、郷土に尽くす
名誉市民 文人 會津八一

今年は文人・會津八一の没後四十年です。新潟に生まれた會津八一は、優れた芸術家であり、教育者であり、学者でありました。晩年は、本市で書の制作に打ち込み、また、郷土の文化振興に力を尽くしました。その功績により、昭和二十六年には新潟市の名誉市民第一号になっています。

會津八一は、明治十四年（一八八一年）八月一日に古町通五番町に生まれ、名前は生まれた日から名付けられたといわれています。

書家、歌人としては、秋艸道人または渾斎という号（ペンネームのようなもの）で、多くの書を書き、歌を詠んでいます。

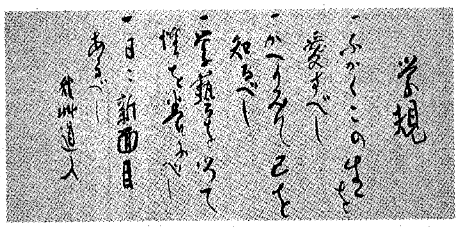
會津八一の書は、太い文字と独特な筆使いが特徴で、多くの人々に愛されています。字体の基礎は、だれにでも読める明りょうな明朝活字を採用したとか…。

歌の世界では自らの歌の系譜を「万葉集、良寛、正岡子規、會津八一である」と語り、万葉集に親しみ、良寛を尊敬したとされています。また、東洋美術史学者として仏像や建築など古美術研究に励み、数多く古都・奈良を訪ねています。そこで詠んだ作品は、奈良の東大寺、唐招提寺などに歌碑として残っています。

郷土で書に打ち込む

空襲で東京の住居が全焼したため昭和二十年（一九四五年）四月、中条町に一時疎開。翌年七月、新潟市に帰郷しました。南浜通に住居（現北方文化博物館新潟分館）を構え、ここで昭和三十一年十一月二十一日に亡くなるまで、書の制作に打ち込んだそうです。墓は西堀通三番町の瑞光寺にあります。

晩年、新潟市で暮らしていたころの會津八一



會津八一が学問への心構えを書いた「学規」（秋艸道人は号）

會津八一は市民の財産

文芸評論家　若月忠信

會津八一は全国レベルの学者だったといえる。後世に残るのは「書と短歌」と本人も語っていたように、歌人、書家として優れた作品を残している。

私が思うに歌人という面が文学的にみて際立っている。約一千首くらいしか歌を残していないが、斎藤茂吉と並ぶ近代短歌史の一ページを飾る人物だと考えている。

短歌の中でも、奈良や奈良の仏像を詠んだ歌が初期の傑作だ。日本人が奈良という土地に愛着を持っているように、會津八一の歌には愛着がある。奈良を訪ねる前には、ぜひ會津八一の歌を詠んでから出掛けてほしい。奈良がなつかしい土地に映ることでしょう。

また、奈良の歌と並んで養女・きい子を疎開先の中条町で亡くした時に歌った「山鳩」や「観音堂」の歌も傑作だ。叙情性を見事に歌いあげている。

會津八一が戦災のために新潟で晩年を送ったことは、新潟市民にとって実際に身近に歌人、書家に親しく接することができてよかったと思う。

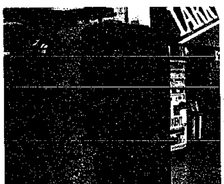
會津八一を尊敬して慕う人は大勢いるが、會津八一を新潟市の名誉市民第一号に選んだのは、市民の心の目の高さを物語っている。新潟市が生んだ會津八一は市の財産だと思う。

歌碑が静かに伝える 會津八一の心

會津八一の歌は歌碑として奈良をはじめ全国に建立されています。市内にはそのうち八カ所あります。

會津八一が生前に建立した市内の歌碑は二つ。北方文化博物館新潟分館の「かすみたつ　はまのまさごを　ふみさくみ　かゆきかくゆき　おもひそわかする」の歌は、東京に居たときに故郷を思って詠んだもの。もう一つ、県立図書館前（女池）にあるのは、疎開のため新潟飛行場に到着した時の気持ちを詠んだ「みやこへを　のかれきたれは　ねもころに　しほうちよする　ふるさとのはま」の歌です。

歌碑を巡るなら、生誕の地（古町モール五）をスタートして、墓のある瑞光寺（西堀通三）、北方文化博物館新潟分館庭園、ドン山近くの西海岸公園、會津八一記念館前、新潟高校、千歳大橋、県立図書館前（女池）が距離的に短いコースです。歌碑で會津八一の心に触れてみてはいかがですか。



生誕の地　古町モール5の歌碑

秋艸道人への思い

肌で感じたおじの愛情

鈴木静子（姪）

東京のおじの家に遊びに行くたびに、肌でおじの愛情を感じてきました。ベッドで寝るのに憧れていた私に、火鉢を三つつなげ、板を置き、その上に布団を敷いてベッドを作ってくれたことがありました。「寝てみろ」といわれたけど、寝心地は悪かった。でも朝に「よかったよ」というと細い目を一層細くしていたことを覚えています。

人をかわいがるということ、大事にするということを自然のうちに教えこまれてきたと思います。

人間味のある温かい人

新潟短歌会主宰　湊八枝

先生の写真を見ると、背が高く、眼光が鋭く、おっかないイメージがあるけど、本当はおやさしい人で、小さな子どもをかわいがっていました。私にとっては厳しい先生というより、人間味のある温かい先生でした。「新潟短歌」という題も名付けていただきました。

先生への気持ちを歌にすれば、「下唇つきだすさまに微笑ます　かの道人の笑顔なつかし」でしょうか。

「自然から学ぶことが多かった」といつも話していた秋艸道人・會津八一

教育者として尊敬

會津八一記念館長　小柳マサ

會津先生は私にとって、お花が好きな「おじいちゃま」でした。

先生は、学芸、学問、短歌、書、随筆と多方面で活躍なされたけど、私は先生の教育者としての生き方や姿勢に非常に引かれていました。私も五十年間教育の道にいましたけど、先生は早稲田時代の三十五年間、本当の愛情を持って教え、何人もの優秀な人を育てたと思います。

下唇を突き出す癖とすてきな笑顔は今も忘れられません。

市民の大きな誇り

新潟市長　長谷川義明

會津先生の歌には、高い学識と人に対する温かな思いやりが溢れています。市長室にも書を飾っていますが、基本に忠実でごまかしの無い線を見るたびに、先生の高潔な人柄を感じます。先生が新潟の出身ということは、私たち市民にとって大きな誇りと思います。

會津八一の足跡

- 明治14年（1881年）　古町通5番町に生まれる
- 33年　新潟県尋常中学校（現新潟高校）卒業
- 34年　20歳で東北日報、新潟新聞の俳句選者になる
- 35年　東京専門学校（現早稲田大学）に入学
- 39年　早稲田大学文学科卒業、有恒学舎（現有恒高校、板倉町）の英語教師になる
- 43年　有恒学舎を辞し、早稲田中学校の英語教師になる
- 大正2年（1913年）　早稲田大学英文科講師になる
- 13年　歌集「南京新唱」刊行
- 昭和6年（1931年）　早稲田大学文学部教授になる
- 8年　論文「法隆寺、法起寺、法輪寺建立年代の研究」刊行
- 9年　文学博士の学位を受ける
- 15年　歌集「鹿鳴集」刊行
- 19年　歌集「山光集」刊行
- 20年　空襲で中条町に疎開
- 21年　「夕刊ニイガタ」が創刊され社長に。新潟市南浜通2番町に住居（現北方文化博物館新潟分館）を構える
- 22年　歌集「寒燈集」刊行
- 23年　早稲田大学名誉教授になる
- 26年　新潟市名誉市民におされる。「會津八一全歌集」刊行。読売文学賞を受ける
- 31年　逝去。享年76歳

訪れる人に語りかける 會津八一ゆかりの地

業績を伝える 會津八一記念館

會津八一の作品と業績を伝える「會津八一記念館」が西船見町にあります。ここでは書作品を中心に、書簡、原稿、遺品など八十点が展示されています。

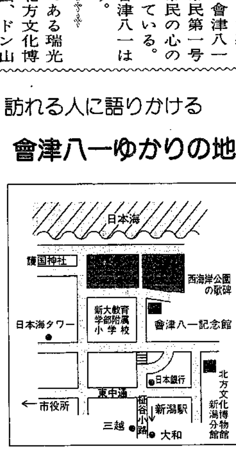
きょう七日からは會津八一の良寛にまつわる歌書と、新所蔵品などを紹介する常設展「迎春・會津八一展」を三月三十一日まで開催します。

開館時間　午前十時～午後五時　※月曜休館
入館料　五百円（大学生三百円、高校生二百円、小・中学生百円）
問い合わせ　同館（☎222-7612）へ

終えんの地 北方文化博物館新潟分館

明治二十八年の建物から続く二階建ての洋館で、會津八一が晩年の十年間を過ごしました。

同館には回遊式枯山水の庭園や茶室があり、園内には會津八一が生前に建てた歌碑があります。

また、館内には會津八一の歌書や良寛の書が展示されています。

開館時間　午前九時～午後四時半（二月まで、三月からは五時閉館）※月曜休館
入館料　四百円（高校生三百円、小・中学生二百円）
問い合わせ　同館（南浜通二番町☎222-2262）へ